

第一章 六条御息所の物語 秋の別れと伊勢下向の物語

[第一段 六条御息所、伊勢下向を決意]

齋宮の*御下り(齋宮が伊勢へ下向なさる日が)、近うなりゆくままに(近付くにつれて)、御息所、もの心細く思ほす(心細くおなりです)。 *齋宮は野宮で一年間潔齋した後の九月に伊勢神宮へ向かう、との事。

やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし(高貴で堅苦しい正妻だと源氏が思っ
て居らした)大殿の君も(左大臣家の姫君も)亡せたまひて後(お亡くなりになった後は)、
さりともと(次の正妻に御息所が迎えられるだろうと)世人も聞こえあつかひ(世間でも噂
して)、宮のうちにも(齋宮を出した御息所の六条邸の女房たちも)心ときめきせしを(期待
していたものを)、その後しも(喪明け後になっても)、かき絶え(御通いが途絶えたままの)、
あさましき御もてなしを見たまふに(思いの他の源氏の冷たさを考えてみると)、まことに
憂しと(あの怨霊を源氏は本当に嫌だと)思す*ことこそありけめと(御思いに為って居るか
らに違いないと)、知り果てたまひぬれば(御息所は思い至り為されて)、よろづのあはれを
思し捨てて(一切の未練を振り切って)、ひたみちに(一途に齋宮の伊勢下向に付いて)出で
立ちたまふ(旅立ちなさいます)。 *「事こそ在りけめ」だけを見ると<事が在ったに違いない>とい
う意味にしか思えないが、元々「まことに憂しと思す」という文は述語対象の「怨霊事件」が憚って伏せられて
いるので、それを補語して明示すれば<あの大殿に乗り移った私の生霊を本当に厭だと御思いになっている
>だから、「ことこそあれ」は「ことこそ理あれ」で<事こそが理由に違いない=からに違いない>に違いない。
そして、この御息所が自分の激情の故に源氏の冷遇を責められないと納得ないし観念して伊勢下向を決心し
たことが、源氏の二条院での紫君との暮らしを正当化させていることを思うと、夕顔と大殿君の死が源氏の
表向き立場には如何にも都合よく、その狂言回しに御息所を使うとすれば、作者は藤壺に執心する源氏を
「鬼」に見立てているようにも思えてくる。最もおぞましい源氏が美しい姿で、自分の手を汚さずに御息所の
怨霊に慄いて見せるというのは丸々ホラー映画で、この物語にはそんな怖さを確かに感じる。尤も、一般に
美しいものを表現しようとするれば、その怖さまで描いたり言及したりせざるを得ないだろうから、どちらが
主題ということより、世の中は怖いと言っているだけかも知れないが。

親添ひて下りたまふ*例も(齋宮に母親が付き添ってお下りになる先例は)、ことになけれ
ど(特には無かったが)、いと見放ちがたき(齋宮がとても放っておけない)*御ありさまなる
にことつけて(幼さだという口実で御息所は)、 *「例」については注に《貞元二年(九七七)九月
十六日、円融天皇の御代に齋宮規子(のりこ)内親王に母親の徽子(よしこ)女王が付き添って下向した事が一
例ある。「ことになけれど」とは、物語の時代設定をさらに前の延喜天暦の御代に置いているからである。》
とある。 *齋宮十四歳、との事。紫君は年末の初夜が十四歳だったから一歳違い。因みに、源氏二十三
歳、六条御息所三十歳、藤壺二十八歳。

「憂き世を行き離れむ(しがらみを断ち切りたい)」と思すに(とお思いだったが)、大将
の君、さすがに、今はと(今は之までと)かけ離れたまひなむも(きっぱりと別れてしまわれ

るのも)、口惜しく思されて(残念に御思いになって)、御消息ばかりは(お手紙だけは)、あはれなるさまにて(情愛を込めて)、たびたび通ふ(何度も遣わされます)。

対面したまはむことをば(しかし実際にお会いする事は)、今さらにあるまじきことと(今更はもう在るまいと)、女君も思す(六条の女君はお思いでした)。

「人は心づきなしと(あの人とはとても嫌だと)、思ひ置きたまふこともあらむに(思つて御出での事が在るのだから)、我は、今すこし(会えば今以上に)思ひ乱るることのまさるべきを(悩みが深くなるに違いないので)、あいなし(仕方が無い)」と、心強く思すなるべし(気丈に御思いに為ろうとされたのでしょう)。

もとの殿には(御息所は野宮から六条邸に)、あからさまに(ちょっとした用足しで)渡りたまふ折々あれど(お帰りになる折もあったが)、いたう忍びたまへば(ごく密やかに行き来されたので)、大将殿、え知りたまはず(お知りになる事は有りませんでした)。

たはやすく御心にまかせて(野宮は源氏が簡単に気の向くままに)、参うでたまふべき(お参り出来る様な)御すみかにはたあらねば(お住いでは決して無いので)、おぼつかなくて(お会いする手立てが無いままに)月日も隔たりぬるに(月日が経ってしまった頃に)、

院の上(あんのうへ、院の父上に於かれては)、おどろおどろしき(大変に重い)御悩みにはあらで(御病気ではないが)、例ならず(いつになく)、時々悩ませたまへば(発作を御起こしに為るので)、いとど御心の暇なけれど(源氏は落ち着かない気分で居らしたが)、

「つらき者に思ひ果てたまひなむも(私を薄情者と思つたままで御息所が恋を終わりになされるのも)、いとほしく(残念だし)、人聞き情けなくや(人聞きも悪く、院が耳にされたら御嘆きだろう)」と思し起して(と思ひ立たれて)、野の宮に参うでたまふ(野の宮に御参りなさいます)。

[第二段 野の宮訪問と暁の別れ]

*九月七日(ながつきなぬか)ばかりなれば(ともなれば)、「むげに(気忙しく)今日明日(斎宮の伊勢下向がもう間近い)」と思すに(と源氏は御思いだったが)、 *注に《晩秋九月上旬、七日頃の月を写しだす。》とある。

女方も心あわたたしけれど(御息所の方も出発の準備に忙しかったので)、「立ちながら(立ち話だけでも)」と、たびたび御消息ありければ(何度も源氏から手紙で会いたいと言われ続けながらも)、「いでや(では、そういたしましょう)」とは思しわづらひながら(とは応じ切れずに来ていたが)、「いとあまり埋もれいたきを(あまり御断りし続けては失礼なので)、物越ばかりの対面は(物を隔ててなら御会い致します)」と(と返事して)、人知れず待ちきこえたまひけり(内心で源氏の来訪を待ち焦がれて御出でのようでした)。

遙けき野辺を分け入りたまふより(源氏は野宮に向かって城外の遙かな野辺をお進み為されたが)、いとものははれなり(晩秋の里は物寂しげでした)。秋の花、みな衰へつつ(みな萎えて)、浅茅が原も枯れ枯れなる虫の音に(枯れ草の原に鳴く虫の音も)、松風、すごく吹きあはせて(松風の強さにかすれていましたが)、そのこととも聞き分かれぬほどに(次第に野宮に近付くと其れとは良く聞き取れないほど)、物の音ども絶え絶え聞こえたる(管絃の音が途切れ途切りに聞こえて来て)、いと艶なり(とても情緒がありました)。

むつましき(源氏の従者は気心知れて物慣れた)御前(ごぜん、先払い)、十余人ばかり、*御隨身(みずいじん、護衛官の六人も)、ことことしき姿ならで(目立たない服装で)、いたう忍びたまへれど(ごく地味な一行だったが)、 *参議兼大将の隨身は六人である、との事。

ことにひきつくろひたまへる御用意(源氏自身は格別に髪形から服装まで身だしなみを調えなされて)、いとめでたく見えたまへば(とても男振りが映えていらしたので)、御供なる好き者ども(従者の心得た者たちは)、所からさへ(潔斎場所たる野宮での艶やかな源氏の姿に)身にしみて思へり(生唾を飲む思いだった)。御心にも(源氏自身)、「などで(どうして)、今まで立ちならさざりつらむ(今まで訪ねて来なかったのだろう)」と、過ぎぬる方(過ぎてしまった時間を)、悔しう思さる(後悔なさいました)。

ものはかなげなる小柴垣を(野の宮は粗末な小柴垣を)大垣にて(外圍いにして在って)、板屋ども(板屋根の小屋が)あたりあたり(ぽつりぽつりと建てられていたが)いとかりそめなり(如何にも間に合わせの質素な作りでした)。

黒木の(くろき、斎宮一代限りなので皮付のまま用いた生木の)鳥居ども(鳥居の数々は)、さすがに神々しう見わたされて(それでも神聖で重々しく見渡されて)、わづらはしきけしきなるに(部外者には憚られたが)、神司(かんづかさ、神官)の者ども(たちが)、ここかしこに(此処彼処で)うちしはぶきて(咳払いして)、おのがどち(彼等同士で)、物うち言ひたるけはひなども(話し合いながら一行を気にしている様子も)、他にはさま変はりて見ゆ(独特の雰囲気でした)。

火焼屋(ひたきや、番所のかがり火が)かすかに光りて、人気すくなく、しめじめとして、ここにももの思はしき人の(此処に物思いに呉れているらしい御息所が)、月日を隔てたまへらむほどを(何ヶ月も世間から離れて過ごされた事を)思しやるに(思い巡らしなさって)、いとみじうあはれに心苦し(とても労しく思われて源氏は心苦しくなります)。

北の対の(奥方様の舎屋たる北の対の)さるべき所に立ち(玄関口で)隠れたまひて(目立たぬように)、御消息聞こえたまふに(一行が来意をお告げになると)、遊びはみなやめて(音楽が止まって)、心にくきはひ(部屋を片付ける女たちの気配が)、あまた聞こゆ(忙しそうでした)。

何くれの人づての御消息ばかりにて(何人もの女房が取り次ぎに入れ替わって出てくるばかりで)、みづからは対面したまふべきさまにもあらねば(御息所が御会いになる様子は無かったので)、「いともなし(随分と回りくどい)」と思して(と源氏は御思いになって)、

「かうやうの歩きも(こうした外出も)、今はつきなきほどに(今は気軽に出来ないように)なりにてはべるを(なってしまうのを)、思ほし知らば(お察し下されば)、かう注連のほかには(こんなふうに締め出したり)もてなしたまはで(なされず、直接お目に掛かせて下さいませんか)。いぶせうはべることをも(胸の詰かえを)、明らめ侍りにし(あきらめはべりに、晴らそうと思って遣って来ている)がな(のですから)」

と、まめやかに聞こえたまへば(実直そうに申しなさると)、人びと(女房たちは)、「げに(これでは)、いとかたはらいたう(本当に申し訳ありません)」「立ちわづらはせたまふに(外にお立ち頂いていた儘では)、いとほしう(気が引けます)」など(などと御息所に)、あつかひきこゆれば(取り次ぎ申し上げると、御息所は)、

「いさや(いやさて)。ここの人目も見苦しう(殿御と会うのは此処の人目が悪いし)、かの思さむことも(大将の御思いも分かるが)、若々しう(年甲斐も無く)、出でみむが(御会いするのは)、今さらにつつましきこと(今更は憚られます)」と思すに(と御思いになれば)、いとも憂けれど(とても気まずかったが)、情けなうもてなさむにも(冷たくお断りも)たけからねば(しかねて)、とかくうち嘆き(溜め息混じりに)、やすらひて(休み休みゆっくりと)、ゐざり出でたまへる御けはひ(膝を進めて出て御出でになる気配が)、いと心にくし(何とも焦れたい)。

「こなたは(此処の)、簀子ばかりの許されははべりや(縁側の端に失礼します)」とて、上りゐたまへり(源氏は簀子に上がってお座りになってしまいました)。

はなやかにさし出でたる*夕月夜に、うち振る舞ひたまへるさま、匂ひに、似るものなくめでたし。 *九月七日とあったので、七日月(なぬかづき)・半月(はんげつ)・上弦の月・弓張り月。源氏の登場を華やかに描写する。

月ごろのつもりを(何ヶ月も会わない結果となった言い訳を)、つきづきしう聞こえたまはむも(あれこれと申し上げるのも)、まばゆきほどになりになれば(今更と遠目に見る思いだったので)、榊をいささか折りて(榊の枝を少し折って)持たまへりけるを(持っていらしたのを)、挿し入れて(縁側から部屋に御簾の下から差し入れて神前の誓いとばかりに)、

「*変らぬ色をしるべにてこそ(変わらない心を道しるべとして)、斎垣(いがき、神聖な神社の垣根)も越えはべりにけれ(も越えて来ているのです)。さも心憂く(それを、そんな億劫そうになさるとは情けない)」と聞こえたまへば(と御息所に申し上げると、御息所は)、*心変わりのない証として榊を奉りつつ、同時に常緑樹の榊の葉に「変らぬ色気」を例える、という事らしい。

「神垣はしるしの杉もなきものを、いかにまがへて折れる榊ぞ」(和歌 10-1)

「同じ緑のしるしでも、杉と榊は別のもの」(意識 10-1)

*注釈に《御息所の贈歌。「我が庵は三輪の山もと恋しくは訪(とぶ)らひ来ませ杉立てる門」(古今集雑下、九八二、読人しらず)を踏まえる。》とある。この「注」で「標の杉」の意味は分かる。引歌は「私の閑居は三輪

山の麓ですが会いたければ訪ねて来て下さい目印に門に杉を立てて置きます」という字面だが、庵に住んで世を捨てている人が来客を待つて門に目印を置く、のでは世捨てになっていない気もする。何か背景がありそうだが、分からない。まあ何となく、今の御息所の状況に近いようには見える。それに、「すぎ」は「過ぐ」の連用中止の名詞化で<過去>や<通過>や<度を越したこと>に意味を掛けるようなので、懐かしさの印でもあるのかも知れない。ともかく、「しるしの杉」は門に立てた来客用の目印という事らしい。また、「さかき」は神に捧げる神聖な枝葉とされ、神と人との境を象徴する<境の垣根>を意味するらしい。従って当歌は「神垣は(かみがきは、此処の野宮の斎垣の門には)しるしの杉も(通って良いという目印の杉も)なきものを(立てていないのに)、いかにまがへて(どうして間違えて)折れる榊ぞ(結界を破る折った榊をお持ちに為ったのですか)」という言い方で、<此方からお招きしたのではなく其方から不意に来られたから>と言って、「さも心憂く=決して億劫なのではなく戸惑ってしまって」と応えている、のだろう。更に「しるしのすぎ」を<効果観面>や「をれるさかき」を<強情を曲げる>とか読んで、源氏の来訪の無さを責めるような気分も少し感じるが、そこまでの深読みは省く。

と聞こえたまへば(と申されるので、源氏はこう返された)、

「少女子があたりと思へば榊葉の、香をなつかしみ止めてこそ折れ」(和歌 10-2)

「いつきのみやの野の宮に、榊の枝を奉る」(意識 10-2)

*私と貴方の仲は「をとめ(夫婦)」なので、また貴方の子の「少女子(をとめご)」は処女の<斎宮>だし、野宮は斎宮が潔斎していらっしゃる「辺りと思へば」、「さかきば」は「境場」だから「榊葉」が必要かと思い、彼の香を懐かしんで、「とめて」は「求めて」であり「留めて(留意して敢えて)」であり、「こそ(そういう理由だからこそ)」、折角「をれ(道を変え)」て榊葉を折って持って来ました、という所だろうか。「をとめご」を出して反論を封じ込めようというのなら、かなり小賢しい。

おほかたのけはひ(周りの空気は)わづらはしけれど(お清めの緊張感に包まれていたが)、御簾ばかりは(源氏は御簾だけはせめてもと)ひき着て(払い除けて)、長押におしかかりてゐたまへり(廂内の敷居に身を乗り出して腰掛けていらっしやいました)。

心にまかせて(源氏は自分が気が向いた時に)見たてまつりつべく(御息所にお会いする事が出来て)、人も慕ひざまに(相手も自分を慕っているように)思したりつる年月は(思ってた来ていたこの数年来は)、のどかなりつる(呑気にしていた)御心おごりに(思い上がりで)、さしも思されざりき(御息所には然程の思い入れは持たずに居ました)。

また、心にうちに(心の中に)、「いかにぞや(どうなのだろう)、疵ありて(あのように強い怨念があるとは)」、思ひきこえたまひにし後(と思ひ申しなさってからは)、はた(途端に)、あはれもさめつつ(情熱が冷めてきて)、かく御仲も隔たりぬるを(このように疎遠になっていたが)、めづらしき御対面の昔おぼえたるに(久しぶりに対面して昔が思い出されると)、「あはれ(何て恋しい)」と、思し乱るること限りなし(思い乱れるばかりでした)。来し方(今迄の事や)、行く先(是からの事を)、思し続けられて(次々と考えなさって)、心弱く泣きたまひぬ(寂しさに涙されました)。

女は、さしも見えじと思し(そうとは見せまいと思ひ)つつむめれど(抑えようと為さったが)、え忍びたまはぬ御けしきを(とても気持ちを抑え切れない御様子だったので)、いよいよ心苦しう(源氏はますます胸が詰まって)、なほ思しとまるべきさまにぞ(やはり伊勢下向を思い留め為さるようと)、聞こえたまふめる(御息所にお話しなされたようでした)。

月も入りぬるにや(月も山影に入ったのでしょうか)、あはれなる空を眺めつつ(物悲しい空を眺めながら)、怨みきこえたまふに(源氏が御息所を引き止めようとお話しなされる内に)、ここら思ひ集めたまへるつらさも(御息所がずっと募らせてきた怨念も)消えぬべし(消えて行ったのでしょうか)。やうやう(漸く)、「今は(今こそ分かれ目)」と、思ひ離れたまへるに(諦めを付けていらしたのに)、「さればよ(こう引き止められては)」と、なかなか心動きて(また決心が揺らいで)、思し乱る(御息所は思い乱れなさいます)。

殿上の(高官の)若君達(わかきんだち、御子息たち)などうち連れて(などが連れ立ってこの野宮を訪れて)、とかく立ちわづらふなる(何かと遊芸を催したと言う)庭のたたずまひも(庭の風情も)、げに艶なるかたに(実に趣き在る形に整えられていて)、うけばりたるありさまなり(城内にある高官たちの寝殿造りの庭との比較を受けて張り合っても見劣りしない様子でした)。*思ほし残すことなき御仲らひに(名残を惜しむ語らいに)、聞こえ交はしたまふことども(御話し合われた事柄は)、まねびやらむかたなし(そのままつぶさに再現は出来ません)。*此処の描写は下世話に読んで読めなくも無いが、潔斎宮での情交は表立った政治問題に直結することから、とはいえ史実でも斎宮自身の潔斎中の密通は在ったようで其の際は退下(たいげ)したらしいが、今回は斎宮の中止も無かったようなので、此処では女房たちが母屋に控えた中で語らうだけの別れの場面と見て置く。尤も野宮の一角で男女が語らって夜を明かすだけでも、問題にしようと思えば大問題に出来そうな気はして、作者のこの場面設定には少し疑問も覚えるし、寧ろこの記述を当時の一条天皇や藤原道長が許した事を思うと、御息所は斎宮の随員に過ぎないから中止されなかったと考えて、あえて当時の関係者内に実際に情交が在ったと見るべきなのかも知れないが、やはり潔斎場での情交は相応しくないだろう。因みに斎宮の野宮での密通については、春画の「小柴垣草子」を「春画 浮世絵の魅惑 I 福田和彦 (ベスト新書)」で垣間見たが、其処で<寛和(かんな)斎宮たる花山(かざん)天皇の息女・濟子(なりこ)内親王が986年に野宮で警護の滝口たる平致光(たいらのむねみつ)と密通した事件>と紹介されていた。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり(この時の為に作り出したような晩秋の寂しさでした)。

「暁の別れはいつも露けきを、こは世に知らぬ秋の空かな」(和歌 10-3)

「朝露に濡れた分かれ道、遠く眺める秋の空」(意識 10-3)

出でがてに(別れかねてこう詠んだ源氏の)、御手をとらへてやすらひたまへる(御息所の手を取って躊躇いなされる姿は)、いみじうなつかし(とても慕わしい)。

風、いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、折知り顔なるを(如何にも別れの時を心得た風情を漂わせて)、さして思ふことなきだに(何でも無い人でも)、聞き過ぐしがたげなるに(寂しさを覚える鳴き声なので)、まして、わりなき御心惑ひどもに(思い切れず

に名残を惜しむ同士には)、なかなか、こともゆかぬにや(歌に思いを移し切って託す事も出来ないのでしょうか)。

「おほかたの秋の別れも悲しきに、鳴く音な添へそ野辺の松虫」(和歌 10-4)

「泣かぬ心算の見納めに、何で鳴くのか秋の虫」(意識 10-4)

悔しきこと多かれど(源氏は自分の至らなさにも御息所の才覚や怨念にも悔やまれる事は多かったが)、かひなければ(今さら取り返しの付かない事だし)、明け行く空もはしたなうて(明るくなる空に人目も憚られたので)、出でたまふ(帰途に就かれた)。道のほどいと露けし(そして二条院に帰り着くまで泣き通しでした)。

女も、え心強からず(とても突き放しきれず)、名残あはれにて(源氏が去った後も名残を惜しんで)眺めたまふ(物思いに沈んで居らした)。ほの見たてまつりたまへる(ほのかに拝した源氏の)月影の御容貌(月の光に映えたお姿や)、なほとまれる匂ひなど(未だ漂う残り香などを)、若き人びとは身にshめて(若女房たちは身に染ませて)、あやまちもしつべく(潔斎宮に居る身でありながら抱かれてみたいと口漏らして)、めできこゆ(褒め称えました)。

「いかばかりの道にてか(どれほど尊い旅路でも)、かかる御ありさまを見捨てては(あの大将の君のお姿を見捨てては)、別れきこえむ(お別れ申せましょうか)」と(と女房たちは)、あいなく涙ぐみあへり(御息所の頑なさが考えられないと涙ぐみ合っていました)。

[第三段 伊勢下向の日決定]

御文(後朝の御文は)、常よりもこまやかなるは(いつもより情が細やかだったので)、思しなびくばかりなれど(御息所も源氏の引止めを聞き入れそうに為ったが)、またうち返し(今更蒸し返して)、定めかねたまふべき(伊勢下向を取り止めにできる)ことならねば(事では無いので)、いとかひなし(致し方ありませんでした)。

男は、さしも思さぬことをだに(然程は思っていない事でさえ)、情けのためには(女を垂らし込む為には)よく言ひ続けたまふべかめれば(熱っぽく口説き続けなさるようすのに)、まして、おしなべての列には(つらには、遊び相手とは)思ひきこえたまはざりし御仲の(思って来てはいらっしやられなかったような間柄の方が)、かくて背きたまひなむとするを(こうして去って行こうと為さるのを)、口惜しうもいとほしうも(たまらなく惜しまれては)、思し悩むべし(思い悩んで居らしたのでしょうか)。

旅の御装束よりはじめ、人びとのまで(従者のものまで)、何くれの御調度など(さまざまな旅道具などで)、いかめしうめづらしきさまにて(上質のいい趣味のものを)、とぶらひきこえたまへど(源氏は御息所に餞別として送り為されたが)、*何とも思されず(御息所は其れらに興味をお持ちになれず、)。あはあはしう心憂き名をのみ流して(軽々しい浮き名ばかりを流して)、あさましき身のありさまを(はしたない姿を)、今はじめたらむやうに(今更のように)、ほど近くなるままに(下向が近付くにつれて)、起き臥し嘆きたまふ(寝ても

醒めても嘆いて御出ででした)。 *「何とも思されず」は<興味が持てない>の意で、下文の状態描写への理由提示となっている構文なので、終止形では無く連用中止だ、と思う。

齋宮は、若き御心地に(若い使命感で)、不定(ふぢゃう)なりつる御出で立ちの(定まっていなかった出発日が)、かく定まりゆくを(近付いてくるのを)、うれし、とのみ思したり(晴れがましいばかりにお思いでした)。

世人は(よひとは、宮廷の人々は)、例なきことと(齋宮の伊勢下向に母親が付き添う事に前例が無いと)、もどきもあはれがりも(非難も同情も)、さまざまに聞こゆべし(さまざまに噂していたようです)。何ごとも、人にもどきあつかはれぬ(人に手振り身振りであげつられて難じられ事が無いような際はやすげなり(身分なら気楽なものです)。なかなか世に抜け出でぬる(却って世に抜きん出た)人の御あたりは(優れた人こそ)、所狭きこと多くなむ(窮屈な思いを多くするものです)。

[第四段 齋宮、宮中へ向かう]

十六日、桂川にて御祓へ(おんはらへ、御祓式が)したまふ(執り行われます)。 *注に<<齋宮群行の日。桂川で祓いをする。「九月十六日」という設定は、歴史上の規子内親王が伊勢へ下向した日と同日である。>>とある。「群行(ぐんこう)」とは<<齋宮(いつきのみや)が野の宮で潔斎ののち、9月に行装を整えて伊勢に下向すること。また、その儀式。(大辞泉)>>とある。「規子(きし、のりこ)内親王」については、群行にあたり母が同行した例として既に在った。密通事件の済子(なりこ)内親王の一代前の齋宮にして、何と其の密通事件のあった寛和2年(986年)に38歳で死去したらしい。

常の儀式にまさりて、*長奉送使(ちやうぶそうし、御送り役)など、さらぬ上達部も(その他の高官も)、やむごとなく(特に身分が高く)、おぼえあるを選らせたまへり(優れた者を帝はお選び為さいました)。院の御心寄せもあればなるべし(院が御関心を寄せて居らしたからでもあったのでしょう)。 *「長奉送使」は<<齋宮が伊勢神宮に下向される時、野宮から伊勢の多気(たけ)の宮までお送りした勅使。納言・参議の中から任せられた。監送使。(古語辞典)>>とある。

出でたまふほどに(出発なさる時分に)、大将殿より例の(れいの、またも)尽きせぬことども聞こえたまへり(名残つきない言々の別れを惜しむ手紙が届けられました)。「かけまくも(口にするの)かしこき(畏れ多い)御前にて(おまえにて、齋宮の御前に)」と、*木綿(ゆふ、白いお供え布)につけて、 *「ゆふ」については<<コウゾの皮を剥いで、その繊維を蒸し、水にさらしたうえ、細かく糸状に裂いたもの。美しい白色をしており、白木綿(しらゆう)ともいう。神事において、幣帛(へいはく)として捧げ、榊(さかき)や神祭用酒饌(しゅせん陶器)に掛けたり、襷(たすき木綿襷)とした。(Yahoo 百科)>>とある。

「*鳴る神だにこそ(雷神できえ、裂けない恋仲だというなら)、 *注に<『源氏積』は「天の原踏みとどろかし鳴る神も思ふ仲をば裂くるものかは」(古今集恋四、七〇一、読人しらず)を指摘。>とある。引歌は「天に轟く雷神も恋仲だけは引き裂けはしない」とアップレである。

八洲もる(やしまもる)国つ御神も(くにつみかみも)心あらば(こころあらば)、
飽かぬ別れの(あかぬわかれの)仲をことわれ(なかをことわれ) (和歌 10-5)

無理に裂かれる定めなら、神のお告げを賜りたい (意識 10-5)

*「八洲(やしま)」は多くの島で<日本国>の事、との事。国の神に別れの訳を聞きたい、とは突拍子も無いが、是は形式上は齋宮にあてた手紙である。国の神に仕える齋宮なら、お返事は国の神のお告げを賜りたい、という事か。

思うたまふるに(どう考えても)、飽かぬ心地しはべるかな(諦め切れませんので)」とあり(と源氏の手紙には認められてありました)。

いとさわがしきほどなれど(出発間際の本当に忙しい時でしたが)、御返りあり(御返事が在りました)。宮の御をば(返書は齋宮からということで)、女別当(によべったう、*齋宮寮女官)して書かせたまへり(をして書かせてありました)。 *「齋宮寮(さいぐうりょう)」は天皇代たる齋宮直属の祭祀実務を司る独立した行政組織。ただ女別当の業務は祭祀実務では無く、齋宮付きの秘書だったらしい。

「国つ神空にことわる仲ならば、なほざりごとをまづや糾さむ」(和歌 10-6)

「仲を引き裂く雷神は、曲がった事が大嫌い」(意識 10-6)

*「空に事割る」「国つ神」は贈歌を受けた<雷神>という事になるのだろう。「なほざりごとを」「糾さむ」は<曲がった事を直す>という言い方で<口先だけの事かどうか調べる>と源氏の不実を非難する鋭さ。

大将は、御ありさまゆかしうて(御祓いの様子が見たくて)、内裏にも(式の最後に宣旨を受ける内裏にも)参らまほしく思せど(参りたいとは御思いになったが)、うち捨てられて見送らむも(捨てられて見送る形に成るのが)、人悪ろき心地したまへば(極まり悪い気がして)、思しとまりて(出向くのを思い留めて)、つれづれに眺めゐたまへり(呆然と物思いに沈んで居らした)。

宮の御返りのおとなおとなしきを(齋宮の返歌が大人びていたのを)、ほほ笑みて見ゐたまへり(源氏は楽しく思って居らした)。「*御年のほどよりは(齋宮はお歳の割には)、をかしうもおはすべきかな(情緒が分かっているやうだな)」と、ただならず(興味をお持ちになります)。 *注に<<齋宮は十四歳。源氏、齋宮に対して好き心を動かす。>>とある。

かうやうに*例に違へるわづらはしきに(源氏はこのような相応しくない面倒な相手に)、かならず心かかる御癖にて(いつも関わりたがる御性分なので)、「いとよう見たてまつりつべかりし(いくらでも親しく出来た)いはけなき御ほどを(齋宮の幼かった頃を)、見ずなりぬるこそ(気に掛けずに来てしまった事を)ねたけれ(残念に御思いです)。 *注に<源氏の性癖。語り手の批評、注解。齋宮という恋は禁制の女性、しかも愛人六条御息所の娘という関係の女性に好色心を動かす源氏の性癖。>とある。

世の中定めなければ(世の中はどう動くか分からないから)、対面するやうもありなむかし(また何時か齋宮と会うことも在るだろう)」など思す(などと御思いになります)。「世の中定めなければ」について、注に<齋宮の交替は、天皇の譲位または崩御、あるいは齋宮の親族の死去などの折。世の無常とはいうが、かなり大胆な仮想である。>とある。

[第五段 齋宮、伊勢へ向かう]

心にくく(奥床しく)よしある(由緒在る)御けはひなれば(群行式の行列なので)、物見車(ものみぐるま)多かる日なり(多く出た日でした)。申の時(さるのとき、夕方四時ごろ)に内裏に参りたまふ(御所に参内なさいます)。

御息所、*御輿(みこし)に乗りたまへるにつけても、*父大臣(ちちおとど)の限りなき筋に思し志して(が娘の自分を后として後宮へ入内させようと御思いに為って)、いつきたてまつりたまひしありさま(大事に御育て下された昔を思い)、変はりて(今は違う立場で)、末の世に(この晩年に)内裏を見たまふにも(主役の端くれとして御所を見渡し為さると)、もののみ尽きせず(万感胸に迫り)、あはれに思さる(感慨深く御思いに為りました)。*「御輿」は帝の乗り物。其の輿に乗って御所内を担がれる女は后であり、正に輿入れの場合だけである。そして、今ひとつが今の齋宮または齋院が天皇の名代として神職に就く場合である。尤も、御息所は齋宮の付き添いだから可也の厚遇になるだろう。*御息所が大臣家の家柄だった事は此処で初めて明示された。

十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。*注に<六条御息所の経歴をいうのだが、年立の上で問題の一文。年立上の整合性よりも経歴を叙述することを優先した記述。>とある。御息所はこの年で30歳で、齋宮は14歳なので、齋宮は御息所が16歳の時の子供。20歳で故前坊だった院の弟宮に先立たれたとしても大体の辻褄は合う。因みにこの年で23歳の源氏と初めて情交したのは6年前で、源氏が17歳、御息所が24歳、の時の事だった。

「そのかみを今日はかけじと忍ぶれど、心のうちにものぞ悲しき」(和歌 10-7)

「娘を祝う嬉しさも、晴れがましきの擦れ違い」(意識 10-7)

*御息所の独詠歌、との事。「かみ」は<上=昔><神><髪><紙>。「上を懸く」は<昔を想う>。「神を懸く」は誠を<神に誓う>からと<願懸け>する。「髪を搔く」は<女を磨く>。「紙を書く」は<恋文を送る>。「今日は其の全てを慎む日だが、秘めた思は物悲しい」という所か。

齋宮は、十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを(とても美しくいらっしやるお姿を)、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ(麗しく仕立て奉り為されていたので)、いとゆゆしきまで見えたまふを(まるでこの世のものとは思えないほど素晴らしい見栄えなのを)、帝、御心動きて(感動されて)、*別れの櫛たてまつりたまふほど(別れの櫛を自ら齋宮の髪に挿して差し上げ為さる時に)、いとあはれにて(とても労しくて)、しほたれさせたまひぬ(涙を流しあそばされました)。*「別れの櫛」は<平安時代、齋宮(いつきのみや)が伊勢に下るときに天皇みずから齋宮の髪にさして与えた黄楊(つげ)の櫛。別れのみくし。(大辞林)>

》とある。天皇自らという重々しさは、齋宮が天皇の代わりに祭祀を行う事が主要な祭事だったという事を示しているだろうし、実際に身内の息女から齋宮を選んだ事にも依るのだろう。

出でたまふを(式が終わって齋宮が伊勢行きに出発なさるのを)待ちたてまつるとて(お待ち申して)、*八省(はっしやう、朝堂院の前)に立て続けたる(に連ねた)*出車どもの(随行車の数々の)袖口(几帳下から覗かせた女房たちの袖口の)、色あひも、目馴れぬさまに(目新しくて)、心にくきけしきなれば(気を引かれる風情だったので)、殿上人どもも(高官たちも)、*私の別れ惜しむ多かり(各自で馴染みの女と別れを惜しむものが多くいました)。
*「八省」は行政官庁八省院で朝堂院のこと、との事。「朝堂院(てうだうみん)」は《大内裏の正庁。本来は百官が政務を執る場であったが、しだいに即位・大嘗会(だいじょうえ)・朝賀などの国家的儀式や宴を行う場となった。大内裏の南中央に位置し、正殿は大極殿、正門は応天門。八省院。(大辞泉)》とある。また、「平安宮では、それまで朝堂院の真北にあった内裏(だいら)が東へ移り、朝堂院の独立性を高め、儀式会場的な性格も強まった。(Yahoo 百科)」ともある。 *「出車(いだしぐるま)」は《盛儀の出行の際の装飾として、出衣(いだしぎぬ)を施した牛車(ぎっしゃ)。また、随行の女房の装束の裾を出衣とした牛車。(大辞泉)》とある。 *この殿上役人たちの「私的な別れ」の記述で、野宮での御息所の歌会に若い君達が日参したという、先に些か唐突に語られた描写の情景がやっと腑に落ちた。御息所の教養の高さを口実に、公達は馴染みの女房達に会いに行っていたと言う訳だ。御息所の見識も歌会の賑わいも、確かに其の姿を擬えられる人物は居たのだろうが、だとしても、それだけで高官が日参する事に私は違和感を感じていた。いや、だがまさか、野宮がお茶屋のように成っていた、とまでは思わないで置く。

暗う出でたまひて(群行は日暮れてからの出発となって)、*二条より洞院(とうみん)の大路を折れたまふほど、二条の院の前なれば、大将の君、いとあはれに思されて(さすがに情感を込み上げ為されて)、榊にさして(御文を榊の枝に挿して御息所に宛てて)、 *注に《洞院大路は東と西の二本がある。西の洞院であろうか。なお、齋宮の群行行路について、河内本は「二条より洞院のおほちわたり給ふほど」とある。別本は「わたり」(御物本・陽明文庫本・国冬本)と「こえ」(伝冷泉為相筆本)とある。直進したような叙述となっている。》とある。平安京の洞院大路は幅 24mもあって、西洞院は朱雀大路から東へ大宮・西洞院・東洞院・東京極と南北に通る大路の二本目。平安時代には大路通り沿いに多くの院が在ったという。

「振り捨てて今日は行くとも鈴鹿川、八十瀬の波に袖は濡れじや」(和歌 10-8)

「越えてしまえば鈴鹿川、濡れた袖さえ乾わ伊勢志摩う」(意識 10-8)

*訳文に「わたしを捨てて今日は旅立って行かれるが鈴鹿川を、渡る時に袖を濡らして後悔なさいませんか」とある。「鈴鹿川(すずかがわ、鈴鹿峠の川)」や「八十瀬(やそせ、多くの川筋)」に特別な趣きが在るのかどうかは不明で、とりあえず浮かぶ情景は<鈴鹿関の難所ぶり>といった所。

と聞こえたまへれど(と遣わし為されたが)、いと暗う(既に暗く)、ものさわがしきほどなれば(行列の進行中の慌しさなので)、またの日(翌日に)、*関の(逢坂の関を)あなたよりぞ(越えた先から)、御返しある(御息所の御返事が在りました)。 *「関」は国境で、官処のある

山城国から伊勢へ向かうと、先ず近江国との関を越える。それが逢坂山に在る逢坂関(あふさかのせき)である。次いで越えるのが近江国と伊勢国との国境に在る鈴鹿関(すずかのせき)である。

「鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず、伊勢まで誰れか思ひおこせむ」(和歌 10-9)

「鈴鹿で濡れるか濡れないか、確かめに来てくれますか」(意識 10-9)

ことそぎで(言葉を削いで)書きたまへるしも(書いて居らしたが)、御手いとよしよししく(筆跡は実に教養に溢れて)なまめきたるに(魅力的だったが)、「あはれなるけをすこし添へたまへらましかば(風情がもう少しあれば、更に良いのに)」と思す(と源氏は御思いに成ります)。

霧いたう降りて、ただならぬ朝ぼらけに(いっそう秋深い明け方に)、うち眺めて独りごちにおはす(物思いに沈んで独り言を呟きなさいます)。

「行く方を眺めもやらむこの秋は、逢坂山を霧な隔てそ」(和歌 10-10)

「逢坂山に消えた人、逢坂山を消した霧」(意識 10-10)

西の対にも渡りたまはで(源氏は西の対にもお渡りにならず)、人やりならず(誰がどうという事でもなく)、もの寂しげに眺め暮らしたまふ。まして、旅の空は(旅の空にいる御息所は)、いかに御心尽くしなること多かりけむ(どんなに思い残した事が多く在ったことでしょう)。